

やまと 民俗への招待

厳しい寒さが続く今月11日、古代ヤマトの郷づくり塾(理事長・柳茂)が開いた見学会に参加した人々と御綱祭りを見た。午前11時頃桜井市大西に着くと、初瀬川の堤沿いに大きな雌綱が泥まみれの人々に担がれて、江包の集落の西端にある素盞鳴神社を目指していた。ミカンや酒を積んだ一輪車も一緒に動いて、随時求めに応じている。

御綱祭りは「御綱はんの嫁入り」とも呼ばれる行事で、奈良盆地東南部、三輪山の西方

の初瀬川を挟んだ江包・大西の集落が舞台だ。江包が作った雄綱と南隣の大西が作った雌綱を、江包集落の素盞鳴神社前まで運び、一つに結び合せる。雄綱は、長さ3・5メートルほどの円すい形で、後ろに10メートルほどの尾をつけた。雌綱は、太くなつた綱を二つに折りにして、綱で巻き固め、後部にやはり同じくらいの綱をつける。

当日は朝から双方の集落で1年間慶事(母屋の新築、嫁取り、婿取り)のあつた家を、綱を



相撲で泥まみれになりながら、雌綱を担いで運ぶ大西の人々=桜井市で今月11日、筆者撮影

豊作導く夫婦の契り

う。どうどうになるほど、神は喜び豊作になると。雌綱は先に素盞鳴神社に到着し、巻き綱を解いて輪状とし、紋付き袴姿の仲人役が「七度半」の呼び使いをして、雄綱を誘う。雄綱は素盞鳴尊で雌綱は稻田姫だという。雄綱は稻田姫だといふ。脣過ぎ、西風が激しく頬を打つなか、二つの綱は固く結び合わされ、双方の尾は初瀬川を越えて東西に張り渡された。県内には、集

落の入口に綱を張り渡すカンジョウカケ(綱掛け)や田植えの様子の交合も演じるオンダ(御田)行事が各地で伝承されている。

侵入する悪霊を集落の境で遮る綱掛け行事に、素盞鳴尊と稻田姫の夫婦の契りを重ねて、同時に生産の豊穣も予祝するものといえる。神の婚姻をばかって、今も江包と大西では結婚を避けるという。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)